

2013年 6月28日

未来への扉

高等特別支援学校 支援部 第50号



「ことばにならない思い」

2学年支援部 野村 聡



1年生のみなさんは校内実習と特別実習、2・3年生のみなさんは現場実習など、それぞれの実習を終えてから、早くも1か月がたとうとしています。生徒のみなさんは、今も、実習の時に見たもの、聞いたこと、体験した一つ一つのできごとを、ありありと思い出せるでしょうか。

私が思い出すのは、受け入れ先の方々が、実習生であるみなさんに、とても心をつくして向きあってくださっていた姿です。2学年の担当として、二つの実習先に行かせていただいたのですが、どちらも長年、本校の実習を受け入れてくださっている所で、様々な経験をつんでいらっしやることもあり、大きな安心感がありました。

ときおり生じる実習生たちの失敗にも、とても広い心で対応してくださるので、見ていて申し訳ない気持ちでいっぱいになることもありました。またいっぽうで、おだやかな中にも厳しさをもって、分かるまでしっかりと注意してくださる場面もあって、ありがたい気持ちでいっぱいになることもありました。

校内で勉強するのはちがいが、実際にたくさんの人々が、生活を成り立たせるために毎日、すべきことに責任をもって働いている中に入らせていただくことは、ことばにならぬほど多くのことを学ぶ機会になります。今回も、実習生であるみなさんは、反省会で発言した内容以上に、ことばにできないほどの様々な学びを持ち帰ったことでしょう。そして私は、この、『ことばにならない部分で得られるもの』が、と



ても大切なものだという実感を持っています。

とくに私たち教師は、生徒のみなさんが社会に出るときに必要なコミュニケーションの力をつけるため、あるいは、気持ちが落ち着かないときや、失敗をしてしまったときに自分を振り返ってもらうためなど、いろいろな意味から、「ことばにする」「ことばで表現する」「表現されたことばを理解する」ということを中心に、話をさせてもらう機会が多くあります。

これはとても大切なことで、世の中には「ことばにしないと伝わらない」という場面が多いばかりでなく、「ことばの使い方」ひとつで、強いきずなを結ぶこともあれば、せっかくの人間関係をこわしてしまうこともあるので、「ことば」についての勉強が、なくてはならないものであることは、あえて言うまでもないほどです。

ですから生徒のみなさんには、「ことばにする」ことや、「ことばの使い方」が重要だ、という話をさせてもらうわけですが、いっぽうで、忘れてはならない視点として、『ことばにならない思い』『ことばにできない気づき』というものがあります。さらに言えば、「ことば」になるよりずっと前の段階の、『意識にさえるのぼらない、感性がとらえる感覚』というものもあって、取りまくすべての環境から受ける影響や、自分の体のすみずみからひびいてくるものが生み出す調子なども含めれば、「ことばに表現できるもの」のほうが、はるかに少ないことがわかります。私たちは『ことばにならない感覚』の中に、生きているわけです。



そうであるならば、「ことばで表現する」ということと同じくらいか、それ以上に、『ことばで表現できないもの・こと』がたしかにある、ということ、大切にしなければならないはず。それは、「ことばで表現する」ということを、ないがしろにする、ということではありません。むしろ、「ことばで表現できるもの」がわずかであるからこそ、「ことばづかい」をいっそう大事にしながら、同時に、『ことばにしきれない感覚』の存在を忘れず、注意深く、敬意をもって、まずは、こ

とば以外のしぐさ、ふるまい、姿勢などに気をくばるべきではないだろうか、ということなのです。

もちろん、しぐさやふるまい、姿勢なども、『ことばで表現できないもの』の、一部にすぎません。それでも、行動というものは、百のことばに勝る力があります。人のふるまいには、『ことばで表現できない』本当の姿が、ありありとあらわれるということです。みずからの感覚でとらえたものや、思いがあるとして、そのうち「ことばで表現できること」はできるだけ「ことば」にあらわしながら、『ことばに表現できない部分』は、行動でしめす努力をする。先の現場実習を思い出すとき、受け入れ先の方々が、実習生への対応の中で見せてくださったのは、まさに、そのような姿勢でした。



ある裁判官の話で、いろいろな犯罪の加害者を見てきた経験から、裁判中、被害者の前では、さほど反省している態度も見せず、そっけない様子である加害者が、かえって賠償金、つまり罪をつくうためのお金を、最後まで払いきる例が多いのにくらべて、裁判中には被害者の前で涙まで流して、反省のことばをすらすらと言うような加害者ほど、賠償金を払わず、逃げてしまうような例が多い、という事を聞いたことがあります。それが、すべての加害者について言えることではないにせよ、「ことば」よりも、『行動』のほうに、その人の本当の姿があらわれる、ということ、伝える話として、とても重みを感じます。

「ことば」は大事ですが、時には、言語化を性急にしないほうがいい、すなわち、『あせって「ことば」にしようとしないうほうがいい』という場合があります。「ことば」にしよう、もしくは、「ことば」を引き出そう、さらには、「ことば」をつめこもう、とするよりも、ほほえみかけたり、ただ行動を見まもっていたり、こちらから行動でしめしたりするほうが、よほど伝わる場合がある。これは、みなさんと関わらせていただく毎日から、私が『ことばにならない部分で得たもの』です。感謝しています。

